

# 家族造形法の深度

## 10 家族造形法の展開 あれこれ

早樫 一男

### ○はじめに

相談事例の実践的検討方法として、家族造形法を活用することについては、これまで、報告してきました。今回は、相談事例以外の活用や展開について紹介します。

事例提出者や担当者が彫刻家役になる、参加者の中から家族役を選ぶ、それぞれのメンバーを粘土のかたまりと違って家族イメージを作っていく、完成後のフィードバックを大切にするといった一連の流れ（基本）については大きく変わりません。

### ○その1 児童養護施設での展開

処遇困難な児童が増えているといわれている昨今、児童や保護者にどのように向き合うかといったテーマは直接処遇職員が抱える大きな課題の一つです。

そこで、ある児童養護施設での事例検討に家族造形法を活用しました。その活用や展開について、3パターン紹介します。

まずは、入所児童の家族を造形として配

置することです。具体的には、入所前の家族（イメージ）、面会・帰省時の家族（イメージ）、さらには、退所後、想定される家族模様（あるいは、こうあればいいなという家族イメージ）などです。いずれを造形するにせよ、改めて、児童本人や家族の理解を深めることが可能となります。

二つ目の展開としては、施設入所中の子どもたちの関係を配置してみるといったものです。「家族造形法」というネーミングですが、造形法は、一緒に暮らしているメンバーの関係性や全体像を俯瞰できる、理解できるといった意味においては、「家族」に限っているものではありません。むしろ、子どもたちを取り巻く人間模様を具体的、視覚的、さらには、体験的に把握できるのが家族造形法の強味です。施設職員が子どもたちの役になってみるということを通して、体感的に学ぶことも大きな利点です。

3つ目の展開としては、子どもたちの周辺に、さらに、職員も配置するといったものです。造形法の特徴である距離感や視線などから、職員との関係性についても様々な発見が生まれます。

児童養護施設での活用は、職員間の情報共有の機会となります。一つのケースをみんなで考えているといった一体感も生まれることとなります。そして、いろいろな役を引き受けて、フィードバックするといったことに取り組んでみると、経験の差は気にしないで発言することも可能になります。もちろん、自分たちの関わり方にも目を向けてみるということにもつながるのです。児童養護施設での家族造形法の展開は、施設職員の自己覚知や研修にも大いにつながります。

これまでの経験では、学級集団や職場集団を造形として扱ったことがあります。

## ○その2 援助者向けの家族造形法紹介プログラム

今年の夏は、家族心理学会でのWSや支援者支援研修（主催：立命館大学人間科学研究所）で家族造形法を紹介するという機会がありました。

参加者は3～50名という多数の中で、「家族造形法の体験」をメインテーマにプログラム展開を心がけました。進め方の概略は次のようなものです。事例は事前に準備をしておきます。彫刻家役はこちらのスタッフの一員です。参加者の中から、家族役を選ぶということはいつもと同じです。

まずは、参加者全体で大きな円を作り、その中で、デモンストレーションのような形で家族を配置していきます。必要に応じて、家族造形法の進め方の解説を挟みます。家族役以外の参加者は、観客として、造形を眺めることとなります。観客は、彫刻を

見ての感想などを数人のグループに分かれて意見交換します。家族役からのフィードバックはいつものとおり行います。

ここまでが第一段階とすれば、次は、グループごとに分かれての造形体験です。デモンストレーションで作った造形を再現します。ファシリテーター及び家族役はグループの中から選ぶこととなります。その後は、グループごとに展開を考え、実施していくというものです。

講義や概略を聞いているだけでなく、また、事例に関しても、頭で考えるのではなく、実際に造形として配置されることによって生まれてくる感情などに集中するという体験は参加者にとって、とても新鮮だったようです。

それぞれの実践現場に合わせて、少しでも、家族造形法を活用してもらえればという思いを強くしました。

## ○「対人援助職のための自己覚知—原家族と向き合う—」(WS)での活用

このワークショップは、参加者自身の育った家族の中で、課題として抱えていることや未解決の課題について取り組むことをメインテーマとしています。

進め方は次のようなものです。家族情報について、ジェノグラムを作成しながら確認（共有）します。その後、家族造形法の手法を用いながら、家族を配置することによって、家族についての考察を深めていく作業が始まります。ここでの家族造形法は援助者自身の原家族のことを考えていく入り口として機能しています。その後の展開

は様々です。

参加者は、自分自身の家族が話題になる際には彫刻家の役割からスタートします。基本は原家族（イメージ）を造形として配置していきます。自分の家族以外のときは、他の参加者が提示した家族の役割を引き受けることとなります。丁寧なフィードバックを重ねながら、展開していくのがこのWSの特徴です。

ある人は、幼いころの家族を造形し、さまざまなフィードバックを確認したのち、「これからの家族」を配置してみることにチャレンジしました。

家族の歴史や大きな節目に沿い、時間をたどりながら、その時々家族模様を造形として作ったメンバーもいました。その都度、それぞれの役を引き受けた人からのフィードバックを丁寧に聞くことによって、さまざまな発見がありました。

あるメンバーは、原家族の造形後、「このようにあったらいいなあ」という配置を確認。その後、両親役との対話場面にチャレンジすることになりました。また、あるメンバーは、家族の位置に入ることにチャレンジしました。実際に体感することによって、何かを発見したようです。さらに、あるメンバーは、家族の大きな節目に沿って、家族造形を展開していくプロセスを通して、ジェノグラムの説明による家族イメージと家族造形により配置された家族イメージのギャップに気づくことになりました。

造形完成後、参加者は関心がある家族の周りに集まり、意見交換するという展開としたこともあります。その上で、これからの家族の関係について、いくつかの家族造形（配置）作ってみるという展開を試みま

した。

繰り返しになりますが、このプログラムにおいては、原家族のことを考えるキッカケとして、家族造形法を活用しています。自分自身の家族について考える際には自ら彫刻家になります。そして、他のメンバーが彫刻家の時は、さまざまな家族役割を取ることとなります。展開はさまざまであり、毎回、まったく同じものではありません。

自分自身の家族をテーマに取り組んだ際には、新たな発見を手に入れることができます。さらに、他の家族のメンバーを引き受けることによっても、自己覚知が深まっているという点が興味深いところです。

## 〇あらためて、一言

家族造形法の活用場面や展開はさまざまです。家族造形法の体験を通して、参加者に不思議な一体感が生まれるということ、その都度、体験してきました。この不思議な体験や感覚こそ、家族造形法の妙味なのかもしれません。